

”百花繚乱ノ巴里”と、 そこに至る道

執筆野平多美(作曲家・音楽評論家)

19世紀末から20世紀前半にかけて、世界ではさまざまな出来事が起こり、花の都、そして芸術の坩堝のパリにおいてもまさに百花繚乱の様相でした。

今年2024年夏は、パリ・オリンピックでたいそう盛り上がりました。フランスという芸術国家の本領を発揮し、その知性の奥深さを存分に披露した開会式では、多くのクラシック音楽が取り上げられていたのはとても嬉しいことでした。ドビュッシー「牧神の午後へ前奏曲」(1894)、「ラヴェル「水の戯れ」(1901)、「サティ」ジムノペティ「第1番」(1888)、「サン＝サーンス」死の舞踏(1874)など、ちょうど今回の「イズミノオト」で演奏される曲目と時代的に前後に重なる作品が並びました。

バロック時代のジャン＝フィリップ・ラモー「優雅なインドの国々」(1835)、「36」のアリアが、ヴェルサイユ宮殿やロワールに点在する城の庭園をモチーフにした、プレイキン競技などの初参加を祝ったためのセクションで用いられたのも印象的でした。何しろヴェルサイユ宮殿が栄華を誇ったのは、踊りの名手、太陽王ルイ14世の時代に宮廷音楽が盛んだった頃だからです。

ラモーはフランス音楽の祖とも言える作曲家です。音楽語法の基礎を「和声論」(1722)として世界に先駆けてま

めました。フランスでは後世の作曲家たち、そればかりか演奏家たちもラモーの「エクリチュール」(音楽書式)の伝統の灯火を、まさに聖火リレーのように現在も繋いでいて、今回の「イズミノオト」を彩る作曲家たちももちろんその潮流に乗っています。

この灯火こそが、フランス音楽に一つの大きな流れを作っているのです。

音楽史上、フランス音楽が栄えた二つの時代

実は前述した18世紀のバロック時代と19世紀末からの現代こそが、フランス音楽において隆盛を極めた2つの黄金時代と言っても過言ではありません。

フランスの古典派時代には大きな特徴もなく、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンというソナタ形式を極めたドイツ音楽が優勢でしたし、ロマン派時代はフランスではオペラが書けなくては作曲家ではないというムードが高まっていたので作曲家はこぞってオペラを作曲し、器楽曲や管弦楽曲の創作がないがしろにされていたからです。前述の開会式ではオプフェンバック「地獄のオルフェ」(1858)からの一曲とビゼー「カルメン」(1875)のアリアが演奏されました。

ただし、1830年にベルリオズが「幻想交響曲」というある意味私小説的なフランスの交響曲を世に問うたことは、フランス音楽史上画期的な事柄です。

集う芸術家、音楽家

19世紀末のフランスが誇るサロン文化は、文学者、哲学者、芸術家がそれぞれ気の合う仲間とくして集うことで相互に大きな影響を与え数多の作品を産みだしました。音楽家も会話やお茶時のバックグラウンド・ミュージックに止まらず詩人や文人との交流に着想を受けて歌曲や劇場作品、そして器楽曲やオーケストラ作品を世に問うようになります。そのサロンで産み出されたのが、クロード・ドビュッシー作曲の「小組曲」(四手ピアノ連弾(1888)と89)です。友人ポール・ヴェルレーヌの詩集「華やかな宴」(1869)に着想を得て作曲されました。当演奏会ではNHK交響楽団首席奏者の神田寛明氏による、フルーティストならではの細やかな配慮のある編曲版で聴けるのも聴きどころです。

サン＝サーンスらは、フランスの管弦楽曲や器楽曲の発展に寄与しようというスローガンのもと1871年に「国民音楽協会」を創設しました。20世紀初頭には今度ほ同協会のあまりにもアカデミズム路線でフランスの音楽以外を認めない閉鎖的な思考を反発して、ラヴェルが師匠フォーレを表に出して「独立音楽協会」を設立したのもいかに良い意味で論争を得意とするフランスらしい対立です。しかしながらこれら二つの協会において、今われわれが耳にする当時の音楽のほとんどが初演されていたことを思えば、音楽史的にとっても有意義なことでした。

芸術にインパクトを与えた当時の出来事

近現代の作曲家には、19世紀末にパリでの万国博覧会がしばしば行われたことも大変大きな影響を与えています。とりわけ1889年のパリ万博こそ、芸術家が強い興味を持つ展示が目押しでした。エッフェル塔の建設で建築の技術に圧倒され、ジャワ島のガムラン音楽はドビュッシーらに大きなインスピレーションを与えたのです。なお、日本初出品は1867年のパリ万博で、日本の浮世絵などがセンセーションに紹介されました。

一方で、1910年頃、興行師セルゲイ・ディアギレフ率いるロシア・バレエ団のパリ公演(ストラヴィンスキーの三大バレエの初演含む)も作品や演出に賛否両論ながらもフランス人芸術家は衝撃を受けました。



1889年のパリ万国博覧会の様子



ダリウス・ミヨー(1892-1974)

- 1643年 ルイ14世フランス国王に即位(1715)
- 1661年 ヴェルサイユ宮殿の造営開始
- 1683年 ジャン＝フィリップ・ラモー誕生(1764年没)
- 1795年 パリ国立高等音楽院創立
- 1803年 エクトール・ベルリオズ誕生(1869年没)
- 1862年 クロード・ドビュッシー誕生(1918年没)
- 1871年 〈国民音楽協会〉設立
- 1888年〜89年 ドビュッシー「小組曲」(四手ピアノ連弾)
- 1889年 パリ万国博覧会開催
- 1892年 (エッフェル塔建設、ジャワ島のガムラン音楽披露)
- 1904年 ダリウス・ミヨー誕生(1974年没)
- 1905年 〈独立音楽協会〉設立
- 1908年 アンドレ・ジョリヴェ誕生(1974年没)
- 1912年 オリヴィエ・メシアン誕生(1992年没)
- 1914年〜18年 ジャン・フランセ誕生(1997年没)
- 1916年 第一次世界大戦
- 1935年 〈フランス六人組〉活動期間(1923年)
- 1936年 ミヨールルネ王の暖炉 作品205
- 1939年〜45年 〈若きフランス〉結成
- 1945年 第二次世界大戦
- 1948年 ジョリヴェ「セレナード」
- 1948年 フランセ「木管五重奏曲」第1番



アンドレ・ジョリヴェ(1905-1974)



ジャック＝エミール・ブランシュ「6人組の面々」(1921年)
※中央はピアニストのマルセル・メイエ。左側、下からタイヌフェール、ミヨー、オネゲル。ピアニストのジャン・ヴィエネル。右側、左上がブランク、隣がジャンコクトー、下がオーリック。デュレはこの頃すでに6人組から離れていたため描かれていない。

Darius Milhaud
André Jolivet
Claude Debussy
Jean Françaix

その後、第一次世界大戦ではフランスは被害も大きく心身に大打撃を受けました。さらに、第二次世界大戦では文化までもドイツによって支配されるといふ恐怖も味わい、同じ音楽仲間であったユダヤ人が迫害されるという胸につまされるような出来事を経験して、その間、作曲家たちは傷ついた自らの思いを発散するように創作へと打ち込むのです。

近現代フランスのワイルドな作曲家たち

ミヨー、ジョリヴェ、フランセ

このフランス音楽史の流れを受けながらも、さらに独自の音楽語法を追求した20世紀フランスのワイルド(奔放)型にはまらない作曲家たちの登場です。

詩人、小説家、評論家ほかマルチな芸術活動を繰り広げたジャン・コクトーを精神的な父とした(フランス六人組(ダリウス・ミヨー、ジョリヴェ、フランセ、ジャン・フランク、アル

チュール・オネゲル、ジェルメーン・スタイクフェール、ルイ・デュレ)の集まりは、1921年に音楽評論家のポール・コレが「ロシア五人組、フランス六人組」という演奏会において命名しました。早熟で子供の頃から詩や音楽に親しんだミヨー(1892)1974は、生地エクサン・プロヴァンスでヴァイオリンを師事したレオ・プーギエ氏の弦楽四重奏団の第2奏者を務め、ドビュッシー「弦楽四重奏曲」(1893)を演奏してこの作曲家の虜になりました。なお、1909年にパリ音楽院ヴァイオリン科に入学したミヨーは、1916年12月10日出版社社主のデュラン宅で、1915年作曲のドビュッシー「フルト、ヴィオラ、ハープのためのソナタ」のフランス初演でヴィオラを弾いています。小説「繻子の靴」の作者ポール・クロードルが全権大臣を務めるためのブラジル行きに補佐として同行(1917)18)したことは、ミヨーに豊かな創作源泉のパレットを広げさせるきっかけになりました。

カンタータや歌劇の作曲の傍で演劇の付随音楽や映画音楽も多く手掛け、あらゆる音楽のジャンルの作品を生涯作り続けたその数は440曲を超えます。

「ルネ王の暖炉」作品205も、もともととは劇作品のための音楽を7つの小品からなる組曲にまとめた。暖炉というのは実は誤訳で、フランス語のLa chemineeは小径le cheminの派生語だと解釈するのが自然であると説く人もいます。中世の時代にエクサン・プロヴァンスに繁栄をもたらした愛すべきルネ王が、自然豊かな当地を散歩する小径という意味を持ち、フランス語では韻を踏む良いタイトルLa cheminee du Roi René(ラ・ニメ・ネ・コロワネ)を狙ったというところもあるようです。

1905年生まれのアンドレ・ジョリヴェは1974年12月20日没で、ミヨーと共に今年没後50年を迎えます。

新しい響きを求める方法を、ジョリヴェはドイツ・ウィーンの手段を用いていることが他の作曲家たちとは異なっています。それは、新しい音階を発想してそれを基にして作曲するか、リズムの反復を利用してその音階を少しずつずらしながら発展させるなどで、聴いているとまるで水の中にボトンと落と

した墨が徐々に広がって思いがけない模様を作り出すような感じを受けます。

新しい音階を発想するというのは、オリヴィエ・メシアンも作曲手段の要として用いていたので、ジョリヴェとメシアンが、ジャン・イヴ・ダニエル・シル、イヴ・ポードリエと一緒に若きフランスを組織したことも納得できます。

ジョリヴェの「セレナーデ」(1945)はもともとオペボエとピアノのためのパリ音楽院卒業試験の課題曲として作曲されました。その後、オーボエをソリストとして、フルト、クラリネット、ファゴット、ホルンと協奏するというコンセプトで木管五重奏に編曲されたのです。

このような音楽環境の中で育った音楽家が、知りすぎた男として個性に留まることは多いと筆者は感じています。過去の響きの中で個性を模索することに熱中するタイプです。フランセの他には、フランス・ブランク、ジャン・ミシエル・タマーズ、アンリ・ソーゲらが挙げられます。

アイデア豊かなフランセが、「木管五重奏曲」第1番の第1曲では奇妙なワルツやメヌエット、そして第2曲では変奏曲とさまざまな形式を取り混ぜて作曲したこの楽曲は、とても軽妙な語り口で、聴いていると口元が思わず緩んで笑顔になることでしょう。

今回の「イズミノオト」は、フランス音楽の潮流を享受しながらも、それぞれの作曲家が模索した個人的な音響をたっぷり味わっていただける、とても心惹かれる演奏会です。お楽しみに！